

ぴと・いん



★ 「丹波のさる酒」新発売
丹波の清酒「小鼓」の醸造元である、西山酒造場から、さるのこしかけのエキスを含んだ「丹波のさる酒」が発売された。



OLD PAR に似た容器

ル年ということもあって評判は上々のようだ。丹波焼の徳利に入つて五〇〇mlが一〇〇〇円。角びん入六〇〇mlが九〇〇円。

穴場ライムライト

三宮の新聞会館のところを国道2号線沿いに東へ3分ぐらい行ったところに、サンサイドホテルがある。

そのホテルの6階に、ライムライトというレストラン

ンがある。チャップリンと関係があるのかどうかは知らないが、落着いた雰囲気で、昔から難病によく効くと評判の高い、さるのこしがけも沢山とれる。

丹波路はきのこ類が沢山自生する数少ない自然境で、昔から難病によく効くと評判の高い、さるのこしがけも沢山とれる。
その中でも、昔から健康に良いと貴重品扱いにされている、靈芝(れいし)から抽出したエキスと蜂蜜、梅の実などで造った珍しいお酒。

口あたりもよく、来年がサ



静かな雰囲気で楽しめる

夜はチキンクリーム煮50円、海老・貝柱・あわびの串焼1000円、ビーフストロガノフ(ピラフ添)1800円、牛ヒレ肉ステーキ3000円などが好評で、シェフの推奨メニューである。

JBAが全国総断

生田神社に参拝

(社)日本バー・テナーダー協会では11月15日に東京で開催



参拝する神戸支部のメンバー

される創立50周年記念全国大会を前に、9月1日から全国縦断キャンベーンを繰り広げている。この企画は飲酒運転撲滅、愛の献血運動、あゆみの箱運動をテーマに全国のJBA各支部を28日に神戸を通過。神戸支部(梅晴夫支部長)では、生田神社で祈願して、大阪支部に車を引き継いだ。

会員同士の親睦も兼ねたこのパーティ、同店専属の歌手、太田亜生さんとオルガンの坂本八重子さんの演奏を楽しんだり、ショーアリ、歌ありのひととき。連日時の経つのも忘れて、延べ約三百人が楽しんだ。
(姉妹店) グランプリ(生田区中山手通1-4406) シャングリラ(生田区中山手通1-1マーリンビル1F) ■391-

● 神戸うまいもん
とドリンク・キング

モントカルロ
メンバーズルーム

生田区中山手通1-ニューホテル
ル1F ■391-0081

会員制のクラブ・モンテカルロが開店1周年を迎えて、会員への日頃の感謝の意味を込めて、去る9月11日~14日の四日間



盛り上がるパーティ



天井の店

にんすま（商標登録出願No.54-024854）とは.....
にんにくを純和風おすましにしたもので、食品分析の結果ビタミンB₂等も豊富に含まれております。

臭いも少なく、かつお風味で召し上がっていただけます。
体内に非常に吸収しやすい状態で摂取出来、滋養・強壮・健康に当店自慢のお吸いものを是非一度ご賞味下さい。

■天井350円 ■にんすま100円 ■にんすま
にゅうめん 450円



にんすま



神戸市生田区元町2丁目87-3 ☎392-3117
営業時間 AM11:00～PM 7:00(年中無休)

Hat dog

なんすい
**軟水のCoffee
味、また格別。**

営業時間 午前10時～翌午前2時

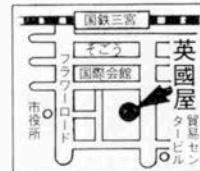
KOBE WATER
ハットドッグ
コーヒーハウス
神戸軟水の店

バス停(中山手1丁目)南側角
☎ (078)321-1689



豪華さとくつろぎと本物の味

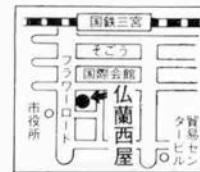
ハイセンスな神戸っ子の憩いのオアシス 気品ある雰囲気のなかでおくつろぎください



● 喫茶館

英國屋

神戸国際会館浜側
TEL 251-4562



● 喫茶館

仏蘭西屋

フワーロード(市役所前)
TEL 232-4643

神戸百店会
だより



★ 20周年を記念して「西川」

「20年は短いです。あつと
いう間に過ぎた感じがしま
す。これからもクラシック
な内に現代のフィーリング
を持つた、品位のある神士



「今後もよろしく」と、西川社長

した、隅々まで心遣いがい
き届いた会場には、さすが
神戸の紳士服と納得させる
心意気がみなぎっていた。
★ 翻ささずにはおれない

ベニヤ秋冬コレクション

9月26日、国際会館で開

かれたベニヤの秋冬物コレ
クションは、ディオールの
プレタから48点。今期のデ

イオールはパントを入れた
肩やベルトで強調したウエ
ストなど、パリ・コレクシ
ョンの主流に添つている。

その中でもろさん樹のプリ
ントやラメ、タータンチェック
などにディオールらし
い品格ある優雅さと個性が
見られた。

「ニードル」をテーマに繰り広げ
られたジュエリーの数々に
田崎真珠の歴史と今後への
意欲がみなぎっていた。今

春のコレクションの折には
渡米中だったメリーリー重富さ
んの新作も今回登場。い

つもながら素晴らしいデザイン
のメリーリーさんだが、アメ
リカで学んだ新しい感覚が
加わって今回は一段と斬新

で、なかでもトルマリンリ
ングが圧巻だった。田崎真

珠の今後の活躍が楽しみだ



ろさん樹プリントのドレス

服づくりに頑張りたい」と
トアロードに本店を持つ西
川洋服店の西川幸利社長。
9月27・28日の両日ロイヤ
ルホテル蔦の間において20
周年記念「秋冬新着展示会」
を開き、日頃お世話になっ
て、そのくせ現代人気質を
持つ西川社長の人柄が反映

★ タサキ新作コレクション
25周年の結晶が……

恒例の田崎真珠「79タサ
キ新作コレクション」が9
月18日～20日オリエンタル
ホテルにて開かれた。今年
で創立25周年、「シンフォ



いつの世も女は宝石に弱いもの



チビッ子による除幕式

9月14日除幕

式がホ

ープス

●待ちに待った元町のファッショ
ンビル「バルバロー」が11月2
日オープン。地下階（紳士・婦
人用品、靴、服飾雑貨、喫茶）オ
ックスフォード、ホットマン、ミ
ハマ、バル・エセル、サンバード
鶴、アド、ROROの店、TOM
BOY、ジョルジ、レッシュ、
錦音屋珊瑚店、1階（紳士・婦人
服、服飾雑貨）、マスヤ・エルモ
キ、マスヤ・カミーノ、クリスチ
・オジヤー、2階（婦人服、服飾雑
貨）バーバリー、マスヤ、ビージ
エ、ラブ、エイミー、ペア、クレサ
ンペール、3階（飲食）ハナワグ
リル、青峰、壁の穴、コスモ、相
生。よろしくお願いいたします。

★松茸の季節ですね。天ぷら、お

すし・ふぐの味で土瓶蒸を。

★国鉄元町駅南側からメリケン波

止場へかけて美しい町並みと作ら

れた「メリケンロード」をつくる

会（坂野通夫会長）から神戸市

ヘアミリア本社のある三義信託

銀行前にて開催。①「スキーハン

スティ

ーピー」の石像

が寄贈され、

にスヌ

ー

ーピー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

午後3回開かれたショウ

はどれも満員で、ディオー
ルをはじめとするクラシッ
ク・パリへの関心が伺えた。

ショウ

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ンビル「バルバロー」が11月2
日オープン。地下階（紳士・婦
人用品、靴、服飾雑貨、喫茶）オ
ックスフォード、ホットマン、ミ
ハマ、バル・エセル、サンバード
鶴、アド、ROROの店、TOM
BOY、ジョルジ、レッシュ、
錦音屋珊瑚店、1階（紳士・婦人
服、服飾雑貨）、マスヤ・エルモ
キ、マスヤ・カミーノ、クリスチ
・オジヤー、2階（婦人服、服飾雑
貨）バーバリー、マスヤ、ビージ
エ、ラブ、エイミー、ペア、クレサ
ンペール、3階（飲食）ハナワグ
リル、青峰、壁の穴、コスモ、相
生。よろしくお願いいたします。

★松茸の季節ですね。天ぷら、お

すし・ふぐの味で土瓶蒸を。

★国鉄元町駅南側からメリケン波

止場へかけて美しい町並みと作ら

れた「メリケンロード」をつくる

会（坂野通夫会長）から神戸市

ヘアミリア本社のある三義信託

★摩耶山天上寺に

見事な摩耶夫人像

51年1月に焼失した摩耶山天寿院（伊藤静藏貢主）に奉

新編　元亨集

開眼法会が去る9月22日、

まやケーブル下駄横の仮設開眼法会が去る9月22日
仏母堂で行なわれた。この像は、関西在住のインド人
が募金を集めて寄贈したもので、インドの彫刻家R・
R・ジャイミニさんが一年半をかけて制作した高さ約
10m、重さ約10tの木彫り像だ。



インドから贈られた
摩耶夫人像

開眼法会にはP・C・ラル・インド航空会長、M・L・トリヴェディ・インド総領事、彫刻家のジャイミンニさんら関西在住のインド人や摩耶山天上寺を復興する会理事長の橋崎四郎さん約七百人が参列した。

文学小部数出版

関西における小部数出版
物流通センターを目指して

（公財）神戸アツクセンター」

（松林信人作表）が「文学
フェスティバル—80年へ」

これには①文芸総合誌・詩誌・タウン誌・詩集などの展示即売会②文芸評論家による講演会などがある。月村敏行氏講演「80年代・文学のあり方」③ティーチイン「同人誌のあり方」が予定されている。

不自由児協会」より、昭和55年「愛の絵はがき」(2枚)、1組、山桜／宇田荻邨画、鯉／梶 喜一画「大人向け」と「友情の絵はがき」(3枚)、1組、ブルートレイン「あさかぜ」プリムラ・ボリアンサ(花)ジャイアントパンダ、子供向け)を発行。どちらも1組60円で、県庁南庁舎1階の財団法人「兵庫県肢体不自由児協会」にて発売中。

A collage of three images. The top image shows a real panda sitting upright. The bottom-left image is a drawing of a small boat on water. The bottom-right image is a drawing of a panda.

世界へと一步進めていただけ
きたいとの、新しい美意識
を持った方が参加されること
により二紀会のメンバー
も共に勉強して行きたい」
という主旨で今回の開催となつた。

会場／生田神社新館

伊藤鶯 782—7401まで

★「愛の絵はがき」と「友

情の絵はがき
社会福祉法人「日本肢体

A collage of three images. The top image shows a black and white photograph of a panda. The bottom-left image shows a small boat on water. The bottom-right image is a drawing of a panda.

また、11月10日～12月10日まで「手足の不自由な子どもを育てる運動」が行なわれ、11月9日（金）12時半より明石市民会館（太）で「鬼太鼓座」の公演が同協会主催で開催される。入場料一千円。

お問合せは協会事務局まで。☎371-2420

ユニークな新番組誕生

ラジオ関西の番組に10月

から新番組が多彩に登場。
△朝のワイド番組△

美術



Al-Dila' S.WACK アルディラ

真夜中を過ぎた頃、東の空にポンと赤く土星が見える季節、山は紅葉、街には足下に枯葉が舞う季節。
お酒が一段とおいしくなるころ、土星のリングがまた増えた。一体何で出来、どうして出来たのだろう?

不思議な世の中に、不思議な人間、そして不思議な酒とくればもう宇宙は爆発しそう。

どうして? それから? 誰が? 一切のせんさくを止めて飲もうでは。

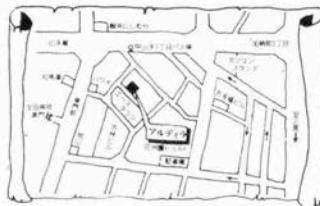
そんな店「アルディラ」。気軽なお値段と雰囲気が自慢です。これが私達の夢。

是非一度理屈抜きておいで下さいませ。待ってます。待ってます。待ってます。



Al-Dila' S.WACK アルディラ

神戸市生田区中山手通1丁目84
(花州園ビルBF)
TEL 332-2855(年内無休)



ルポルタージュ

●知らない人の神戸 / 5

有馬から

蒼

カメラ／緒方しげを

一

毎朝配達されてくる新聞を、表から頁を捲つていく人と、裏からめくつしていくのと二通りの人間が居る。それを、政治に关心があるか、スポーツに興味を持つかの違いだと、簡単に割り切ってしまう愚をおかしてはならない。いつの日か、私は裏から頁を捲つて行くようになつ

た。が、依然としてスポーツには、余り関心がない。どちらかと言えばまじしも、私の关心は第一面の方にあるのに、やはり裏から見て行つて、自分の気に付く。恐らく、それは、人間の体质、その人の生き方に深く関わることなのであろう。



瑞宝寺跡公園にて

同じように、人の自然への関わり方には二つある。一

つは自然を見下さない、何となく落ち着かないタイプ。自然がどうなっているのか隅まで把握し、その中における自分の位置を確認することで心は平衡を保ち安心しておれる。ここでは自然は明確な対象として、見透かされている。

それに反して、自然の靈気を呼吸することに大きな楽しみを見出す姿がある。ここでは自然は人間の量りしけぬ神秘な存在としてある。

私は三年半余り、だだっ広い世界にばかり生きて、帰つて来た時、胸を圧する何とも言えぬ息苦しさに悩まされてならなかつた。それを私は、自分の視線が山にぶつかる所為だと考えていた。今、思うと、それは自然を見下し、客体として強引に捉え、自分の理解の範疇に閉じこめて來た報いであつたのかもしれない。しかし、隅から隅まで遙かに大地を見通しながら、トラックターで地表を耕している時に、一体、どんな自然の靈気を感じることが出来たであろう。一つの自然との接し方が不可能なとき、私が日本の自然から復讐を受けたとしても、それは必然であつたのかもしれない。

おそらくあの時期なら、私は有馬の佳さが理解できなかつたであろう。有馬と私は全く異質なものとしてその両極に在つたのだから――。

燃えるが如き紅葉で身も心も染めぬかれる有馬の秋もそば降る雨に白い花弁の舞う桜の春も、山が薄衣を被つて凝然と凍てつく月光に身を縮めている冬も、私の心にどんな安らぎを与えることが出来たであろうか。しかし今、私には有馬の佳さが分るので、私の身に沁み透るよう、滝川の清流は流れ、色づき始めた木々の葉は、高く澄んだ空を背景に余りにも美し過ぎる。

冷涼な秋を吸い込んで街を歩いていると、人は日頃考えぬ他人のことによく神経をやる、優しいことになるて来る。

有馬は、狭隘の地である。

乳房に似た母なる山懐に深く抱かれて、温泉郷は在る。山狹をY字型に合流して流れ渓流のうちに、木造の昔ながらの宿屋があり、近代的なホテルの威容があり、木立中に隠れて保養所があり、寺院がある。

人はよく有馬を京阪神の奥座敷と呼ぶ。しかし、奥座敷と言うには有馬は余りにも自然と融和し、四季折々の自然の移ろいを映して、息づいている。

有馬を真に味わうには、自然がこの山峡において為すその襞に、素直に抱かれてあれ、自ら自然そのものの靈妙なる気に己を捨てることであろう。自然の息吹を、自らのものとして、はじめて散策も、"をんせん"も本来の意味を取り戻すというものである。

をんせん街の南東の外れで六甲川に懸る橋の袂に、"左宝塚右をんせん"の文字が読める荒削りの石碑が立つてゐる。大阪方面から、かつて人々はこの道を通ってこの街に入った。杖をついて、六甲川を"をんせん"の側に渡つた人々は、何日か後には元気になり、橋を渡る時に不要になつた杖を捨てて帰つて行つた。人よんで、杖捨橋という。誰がつけたか、この橋こそ、をんせんの本来の意味を表わして、大変象徴的な名前である。

北陸の温泉などと違つて所謂夜の遊びの方には全く縁のないをんせんなればこそ、昨今の温泉というものの持つイメージを塗り変えて、有馬はその獨特性を保つ必要がある。百人居ても、完全な健康体を搜すのが難しいような現代人を前にして、これ迄の温泉は、少し怠慢に失した傾向がありはしないだろうか。

企業の慰安旅行の団体がやつて来て、夕食を兼ねた宴会が済むと、肝心の風呂もそこに麻雀が始まつ。夜遅くまで牌をかきまわしていく、翌朝その手で、充血した眼をこすりながらバスに乗り、「なんや、有馬ってなんにもあらへんやんけ」と、そそくさと帰つて行く。彼等を、そのまま帰らせてよいものだろうか。旅館の方は

から、たまに二日続いて泊る客が来たりすると、献立変えんならんと変なところで驚いたりもするそな。

もともと有馬は歴史的に、湯治のための温泉で、今を去る奈良に大仏が建立されている頃、僧行基が一寺三院、即ち温泉寺、施薬院、藍若院、菩提院を建て、病人を収容したと言われている。行基は天平年間、伊丹に布施屋（施療所）を設けたとも言われているし、摂津に於ける行基の幅広いセツルメント活動にとってこの有馬は絶好の場所であったと思われる。海よりも辛い有馬の強食塩泉は、胃腸病・婦人病・神經痛によく、ラジウム泉は呼吸器に、炭酸泉は皮膚病・心臓病によく効く。日本最古ということも然る事ながら、有馬には日本一が多い。塩素イオンからカリウム、セシウム、ルビジウム⋮⋮⋮その他の含有量において群を抜いている良泉である。

ために鎌倉時代には仁西上人が薬師を守る十二神将になぞらえて、十二の坊舎を建てた。その名残りは今も旅館の名に「坊」という字が多いので知られる。また、豊臣秀吉との関りは、千利休などと茶会を開いた時の茶釜が善福寺に宝物として残っているし、念佛寺の石垣は秀吉公別館の跡と伝えられている。今も豊公を偲ぶ大茶会が十一月二・三日の両日にわたって瑞宝寺跡、「日暮しの庭」で開かれている。

「有馬千軒」とうたわれた文化文政期について、郷土史家の森博さんの話によると、有馬の人々の暮しは、そのほとんどが筆と籠に依っていたと云うことである。今はもうほとんどなくなつたが、有馬の周辺は竹ヤブが実に多かつた。そして、狸、鹿など筆の毛にも事欠かなかつた。その頃あつた八十軒の旅館も小さいもので、だいたいが二階二間を自炊宿として貸し、下では筆や竹籠の商売をしていると云つたものが殆んどであつたらしい。民芸品としても有名な、有馬人形筆、茶人や生花の先生が得意先だと云う有馬籠として残っている。筆の産地として現在全国生産の九〇%を占め、画筆や化粧筆をアメリカに輸出している安芸の熊野は、その技術が有馬からも

たらされたものらしい。籠の方は別府に技術を輸出されただと云うことである。

この辺りで、有馬のきれいどころの話をしよう。一時は百二十人ほどいた芸者さんは現在総数七十人。二十歳代の人から七十歳の人まで居る。七十と云つても現役で、お化粧をすると途端に見違えるようになる。有馬の芸妓は、三味線は言うに及ばず、長唄小唄から民謡、踊りと文字通りの本格派芸者ばかりである。

「芸者高い高い言うて何言うてまんねん、他人の花は赤い。何やつても好えことあらへん。テレビ見たらあんなんばかりや。ちよつと服着たら好えのにと思うようなんもんばかりや。芸者は、シャツボ（鬱）一つでも二十万はするし、裾の長いのつけたら百万はかかるてまんねん。それに唄や踊りの月謝も高うなりましたし、お師匠さんの発表会などのおつきあいと、本当に芸妓が可哀想や。昔はよろしましたなあ。客も落ち着いてるし、情緒がおました。夕方など浴衣がけで滝へでも行きまほか言うて、蛻取つたり、河鹿の声を聞きに行つたり、炭酸水飲みに行つたりなあ、粹なお客が多うおましたなあ、そりや、お客様でも、歌が上手で声にホロホロとなるような人が来はりました。それに、お花も長いしね。今はもう団体さんには幹事がでけてから、一席や言うたら二時間や、二時間たつたらお返しでんが、そこをもうちよつと情を持つてやつて欲しい。この頃神戸から、えらいハイカラはんが入つてまんねんて、まるでバアみたいや、コンパニオン云うて。そやけど、有馬の芸者はえろまつせ、夜も夜中もなしに火事や何や云うたらすぐどん行くし、そんなんコンパニオンやヤトナ（雇仲居）がとんで行きまつか」

念のために言つておけば、今でも所謂粹なお客は、月

に二、三人はあるらしい。大体、五十歳位の人で、唄がうまく芸達者で、そんな人には反対に芸妓が今日は嬉しくしようがない、今日の花代こちらの方で持りますわと言つたとか言わんとか、でも時代はもう、大きく変つてしまつたのである。ただ言えることは、有馬にて四季折々の自然の中を散索しないのは、をんせんに来て湯に入らないで帰るようなものだ。

鼓ヶ滝の水音、焼けるような紅葉を映す滝川の流れには自然を感じる。ナイヤガラの滝や、ブラジルとアルゼンチン、パラグアイの三つの国境にまたがるイグアスの大漠布を知つているが、それ等より遙かに深く自然を観ずるのは如何してなのだろう。あの深くジャングルのど真中に横たわる大漠布以上に、公園をわずか百メートル程入つたところにある細い滝の流れが、どれ程か深く心



私の身に沁み透るように、滝川の清流は流れ、色づき始めた木々の葉は、高く澄んだ空を背景に余りにも美し過ぎる。（鼓ヶ滝からの清流）

に観入する自然であるのは、不思議なことだった。

最後に脱俗の大人の風貌ある、有馬観光協会専務理事の永岡大純氏の言葉をもってこの項を閉じよう。

「根本としては京阪神の奥座敷と云う性格は變るまいが、奥座敷と言つても密室めいた遊びをする場所ではなく、もっとオープンなもので、六甲の山を背景にその中で眞の清遊のできる場所。温泉と六甲の緑と歴史。家族連れが安心して遊べるのはもちろん、湯治場、慰安旅行、会議から接待まで多様な目的に、もっと気軽に利用して頂きたい」。

ついでに蒼氏の蛇足。先日衆議院の選挙があつたが、政府は人が病氣をしたら、国民を薬漬けにする前に、せめて一週間でものんびり温泉に漬けて、杖捨橋で本当に杖の捨てられる世の中にほしいものだ。

（次回は六甲山全山縦走コースより）

施設の月

鄭承博 絵・吉見敏治



郵便受から朝刊を取り出すと、まつ先に社会面を抜けるのがくせになっていた。今朝も借金を苦にした一家心中の記事が載っている。これを読み終るなりアキはただ啞然としてしまった。

この種の事件は、大抵似通つてはいるが、これはあまりにも自分の過去に生き写しである。両親と二人の男の子が死んで、長女だけが生き残つたあたりも全く同じであった。

小学校を終えて中学校へ上つたばかりの春先であつた。ある日まるで深い夢からでも覚めるようないで気がつくと、そこは病院のベットで、周囲には看護婦が何人も立つていた。

「よかつたわね。あんたの寝床は窓際だったから助つたのよ」

とは言われたが、急に何のことかさっぱりわからないガスで一家心中の生き残りであることを知らされたのは、それからかなりの時間が経つてからである。

経営していた小さな鉄工所が破産したことはずうすうす

知っていた。債権者や高利貸に責め立てられる父を何度も見かけたことがある。しかし、まさかこんな事態になるとは想像もしていない。当時はまだ、どこかに父も母も弟たちも生きているような思いにからながら、病院からそのまま施設へ引き取られて行つた。

それでもまだ信じられない。そのうちにきっと誰かが助けに来てくれる。そんな思いを抱き続けながら二年が過ぎた秋口である。夜半にふと目が覚めたので庭へ出でみた。ちょうど満月が頭上へ來ている。アキの家も神戸の和田岬で、二階のベランダから近くの海上に浮ぶこんな月をよく眺めた。以来、一度も戻つてない。近所と一緒に遊んだ友だちの顔が浮んでくる。死んだはずの両親や弟たちも、空中から手招きをするような錯覚に陥つた。郊外とはいえ、ここも神戸の圈内である。歩いてでも行けないことはない。みなが寂靜まつているのを幸いに、とうとう支度を整えて施設を抜け出した。

車が雑踏する道路をひたすらに歩いて、和田岬へ辿り着いたのは夕刻に近い頃である。町内に入るなり、そこの路地から、今にも弟たちが自分を呼びながら走り出してくるような思いであった。ところが、住んでいた家はきれいに取り壊わされている。昔の高い雑草の生い茂った空地になつて、形の崩れかかった廃車が一台捨てられていた。

すぐ近くに幼稚園から小学校まで一緒だった友だちの家がある。よく遊びにも行つてるので家族の顔もはつきり覚えていた。開け放された玄関を覗くと、おばさんが立っている。急に噴き出してくる涙を堪えながら「おばちゃん、うち、そこにいたアキよ。おなか空いてんね。何か食べさせて」

というのがやつとであった。そのまま土間へうずくまつてから間もなくである。

「あら、そうか、あんた逃げて来たのね。困るわ。うちの娘はこんど高校よ。受験勉強もあるし、いまピアノの稽古に行つてんの。さあ、これ上げるから早く帰つてよ」

その後、足下へ百円玉が二つ三つばらばらと転がつた。こんどは大声を立てながら奥にいたおじさんが飛び出していく。

「あかんやんか、そんな者に金をやつたら。くせになつて何べんでも来るぞ。警察を呼んで引き渡せ」と怒鳴つた。気がつくと、表にもいっぱい人がたかつてくる。もう金など拾い上げる暇はない。そのまま立ち上つて、無理やりつかみかかる大人たちの腕を振り切るなり、わんわんと泣きながら、一目散に町筋をただ走つた。

それからは何処をどうさま歩いたのかはつきりしない。ともかく日が暮れて間もなくである。車のライトと町の明りを避けて、海岸へ出てきた。大きな建物の影になつた暗がりへ座り込むと、そこは突堤の入口で、海からの風も吹いてくる。ビルの壁に凭れて、昨夜来歩き続けた両足を伸ばした。眠気に誘われてうとうとしたときである。すぐ近くで吹き鳴らす笛の音に驚いた。見回すと前の通りに夜鳴きのラーメン屋が来ている。いつの間にか客も数人来ていて、みながどんぶりから、大つかみにすくい上げてはすすつていて。屋台からは湯気もむんむんと立ち上がる。これを見ているうちに、空腹感が全身をしみつけてきた。ついには氣も狂いそうになつてくる。ちょうど客の切れ目を幸いに、意を決して立ち上つた。

ひょろひょろと洗物をしているラーメン屋に近づいて「おじさん、お金がないんね。一つぱい食べさせてよ。そのかわりお仕事手伝うわ。食器洗いならうち馴れてもんね」

「ほう、お前、歳いくつや」

「もうすぐ十七やね」

と答えて間もなくであつた。手拭いて屋台から出てきたラーメン屋が、突然両肩を抱きしめて何処かへ連れゆく。暗い石段を降りて、そこらに群がる解へ飛び乗つた。

「おとなしく、言うことを聞いたら、ちゃんとお金も上げるがな」

「恐いよ、恐いよ、放してよ」というので、はつと感ずいたが、もう船の上である。

七懸命こ換へてはみをもの

駐車場を出る

と興奮は晦いてはみたものの、疲労と食えしついた体から、
らは、何ほどの力も出ない。そのまま、大男の鋼鉄のよ
うな腕つぶしに抱き込まれて、気がついたときは、もは
や深い深い暗黒の船底であった。

それ以来ホステスになつてもう十余年、いまも三宮界
隈で、バー やキヤバレーを転々としている。何かの鬱憤
を晴らさずには死ぬにも死に切れない。そんな思いを燃
やし続けながら生きてきた。この新聞にも長女が一人生
き残っている。アキはこの娘もきっと、自分と同じ道を
辿る気がしてならなかつた。

る。このたびは何か思わくが違つた

「ねえ、いつまで走るのよ。うち、もう疲れたわ

「心配せんでも、寝とつたらいいね

それからどうものは何を言つても取り合わない。ねぎ色っぽい話、持つ、ひけてはみこぼ、ふ字、うな語り

さと色っぽい語も持たかけてはみたが全くの空振りでどうとう限負けをしてしまつた。

うとうとしてから気がつくと、夜がすっかり明けてい

かなり禿げ上りではいるが、また中年男である。両手をもじもじさせては終始にやにやしていた。お愛想のつ

モリヤ

「このお金どうしたのよ」
と尋ねると、誰でもいいからこれで一泊の旅行につき

合えという。札はしめて十万円だと念を押していた。

号無視もしばしばであつた

長い坂を登り切ると、力きた朝日が昇ってくる。次の町へ入ったときは、もう道路が混雑してきた。前方には

車が並び、対向車も列をなしている。交差点で止まるたびに

「わたしがつき合つてあげるわよ」

と言つたが、別に口出しをする者もなく、それつきり

店が引けたので、約束の駐車場へ行くと、ライトバン

にエンジンをかけて男が待っている。助手席へ乗った。「何処まで行くのよ。おつき合いは明日の夕刻までよ。

約束は守つてね』

た海に、きれいな海岸、特にいまの秋口は、見晴らしのいいときだ」

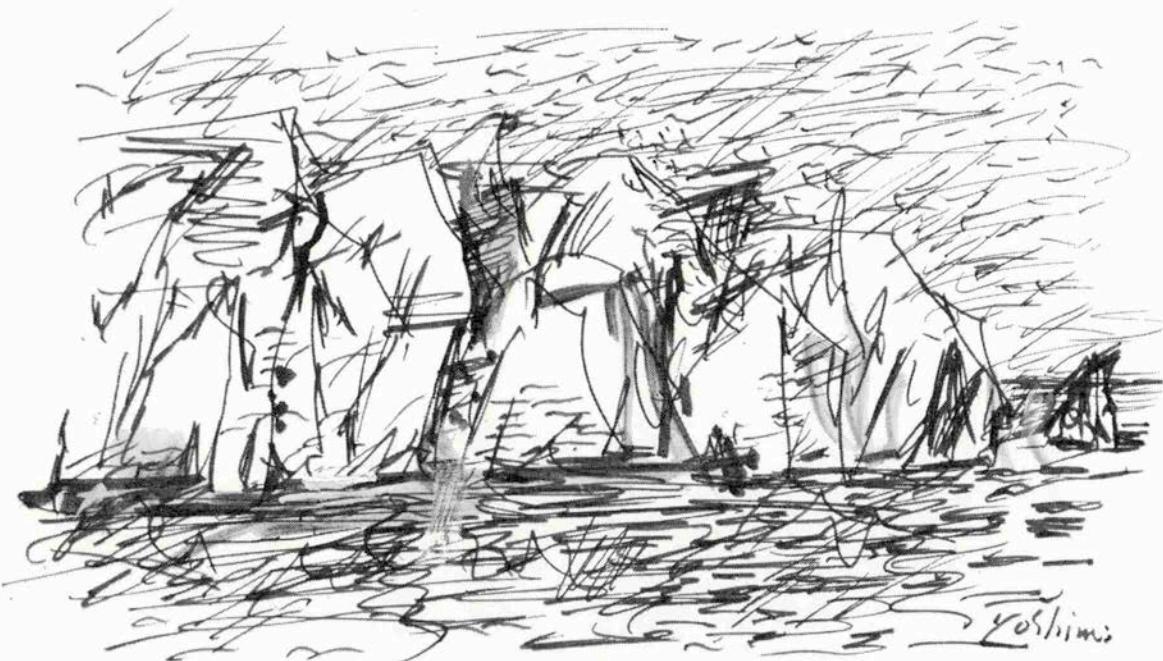
「なんやあんた。女を買うて、景色みんに来たんかいな」

「一度でいいから、君のような美人を乗せて、この海岸を走つて見たかったからよ」「それならそれと、最初からいいえいのよ。居眠りなんかしないで、サービスして上げたのに。いくら水商売ではあっても客の金をただでは取らないものよ。これをわたしら、三宮気質というの。どう、煙草でもつけて上げようか」

しかし男は首を振つた。顔色は相変らず蒼ざめて、目付も一向にゆるめない。なるほど海が見えてくる。長い海岸線も一望であつた。

小さな漁村を過ぎて間もなく、前方に車の渋滞が出来ている。事故があつたらしい。トラックの積荷らしい物が散乱して、パトカーに救急車、多勢の警官たちで賑わつていた。車を除行せながら男は、どちらか取り出したサングラスを大急ぎでかける。どうやら警官に顔を見られたくないらしい。その慌て振りも順当ではなかつた。これは何かの犯罪者に間違いない。逃走のカムフラージュには、よく女が使われる。小説やテレビでは見てきたが、まさか自分が利用される羽目に陥るとは夢にも思わなかつた。

現場が遠ざかつても、男はサングラスを離さない。初秋の風は車内へいっぱい吹き込んでくる。アキもかつては、犯罪者になりたいと思い詰めたこともあった。世の中に恨みをもつ者にとっては、一番ふさわし



い生き方だからである。とうとう実現は出来なかつた。いまでも自分の腑甲斐なさに、ときどき愛想をつかすこともある。

それにもこの男は何をしたのだろう。殺人か強盗、麻薬に暴行、外見だけでは判断つかない。それよりもアキは、強張り切つた彼の表情を、少しでもときほぐしてみたかった。

「ねえ、そこにドライブインが見えているわ。海辺の高台できれいなところや。あなたの好きな景色でも眺めて、お食事しようよ」

といつて凭れかかつたが、男は体まで硬直している。

こんどは肩へ抱きすがつた。

「うちおなかも空いたわ。そうしようよ。ねえ、ねね？」

顔を見上げて何度もゆきぶり続けると、やつと頷いて車を寄せる。駐車場へ入つて降り立つたが、神戸から乗りづめの足も腰も、ひりひりとしびれていた。店内に客はまばらである。隅つこの席を選んだ。壁面は総ガラス張りで、熊野灘が一望である。男もサングラスを取つて、じつと外を眺めていた。

「ねえ、外ばかり見ないで、こちらも向いてよ。わたしつしまらないわ。運転中はお酒を飲めないのが残念ね。店でなら、思い切り酔いつぶすんだけど。あんた、おうちは何処よ。押しかけていかないから教えて。どうせ奥さんもお子さんもいるんでしよう。ねえ何か話してよ。それとも、やすやす身分を明かせないわけもあるの。わたしだつてこの道のベテランよ。何を聞いたつて驚かないわ。水商売の女だと、ばかにしないで。もつと信じてよ」

「俺に構うことはないよ。君こそ飲みたけりや、酒でもビールでもどうぞ」

何も聞き出せない。アキはひどくブライドを傷つけられた気分にもなつてきた。これまでそうとうな堅物でも解きほぐしている。この男だけは箸にも棒にもかられない。運ばれてきたかんたんな食事を済ませて、自分は

何のために乗せられてゆくのかはつきりしないまま、また車へ乗り込んだ。

それから間もなく町外れへ差しかかった。海辺の小さな空地へ車を止める。

「君、おかげで、生れて初めての晴れをさせてもらった。ここがおいらの古里だ」

「だつて車は神戸ナンバーじゃないの」

「生れたというだけで、子供のときからの神戸っ子。ぐそに紀勢線の駅があるね。もうすぐ大阪行きが入るわ。すまんが君、それに乗つてよ」

アキは咄然としながらドアを開けて降り立つと、男はフルスピードで走り去る。みるみるうちに、町を通過して、海岸線を疾走していた。

列車を乗りついで、夕刻、神戸へ戻つたが、その翌日である。アキはいつものよう郵便受から朝刊を取り出した。今日も社会面を拡げると、小さな見出しで不思議な記事が載っている。

破産した自殺男、釣り人に助けられる！

ぎよとしながら読んでみた。昨日の男に間違いない。場所も時間も別れた直後である。乗つたまま海へ飛び込んだ車もライトバン、アキは思わず溜息をついた。

立ち上つて窓を開けると、神戸港には碇泊中の巨船群、道路という道路は車で埋まつてゐる。たしかに豊かな時代だ。しかし、交通事故に破産、果てしなく不幸も産み出している。自分も最悪のくじを引いてしまつた。ところが同じ運命の者が日増しに増えることも事実である。この実情をしつかり見届けて、あの世の家族へ報告をするのが、生き残つた自分の義務にも思えてならなかつた。



□筆者紹介／鄭 承博

鄭さんの作品の底には、常に「別者」を見つめる眼がある。下積みの人間や浮かばれない人間への訴え、「歌声」を、一貫して作品化している。「施設の月」は、その基礎ともいべき作品である。昭和47年、裸の捕虜で日本農民文学賞を受賞後、身体をこわし、長らく執筆を中心としたが、3年前から再開、これから頑張りが期待される。昭和48年ブルーメール賞(文学部門)受賞。洲本市在住。56歳。